
桜の中で

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の中で

【Nコード】

N3169L

【作者名】

緋色

【あらすじ】

桜咲く季節。

桜咲く卒業式。

大切な親友と大切な彼女と新たな季節に歩き出す。

前編（前書き）

二作目です。

恐らく前後編になると思います。

前編

” 白い光の中に山並みは萌えて”
” 遥かな空の果てまでも君は飛び立つ”
” 限りなく青い空に心ふるわせ”
” 自由をかける鳥よ振り返ることもせず”
” 勇気を翼にこめて希望の風にのり”
” この大空に夢を託して”

体育館に並べられた椅子に静かに生徒が座っている。

今だけは普段騒がしい奴らも静かだった。

この静けさの中、どこからか泣く声が聞こえる。

けれど、誰もそれを止めない。

寧ろ、泣いてる人のほうがこの場では合ってる。

俺はステージの上の一際目立つ幕を見た。

書道の先生が書いたのか、とても立派な字がそこにあった。

「卒業証書授与式」

三年間親友と、大切な仲間と過ごした学園から今日羽ばたく。

物語なんかじゃよく桜の花びらが舞う中での入学式や卒業式がある。

けれども、現実でそれを見たことのない俺は、やっぱり物語は物語だ、なんて思っていた。

しかし、例年よりも暖かった今年の冬。

俺は桜が咲き誇る校舎で卒業式を迎えることができた。

「俺たちも卒業か」

卒業証書を片手に、満開の桜の下で真也が言った。

「あっという間だったな」

ぽつりと眩き、俺は桜を見上げた。

「ああ」真也も俺と同じ様に桜を見上げた。
本当にあつという間だった。

思い返せば、入学直後にもこうして桜の下で真也と話したっけ。
こいつとの仲も長いんだな。

「そういえば直人は？」

俺と真也といつもつるんでいた親友の姿が見えなかった。

「ああ、あそこだよ」

真也が指差した方向、人だかりの奥の校庭の隅に直人と見知らぬ女子生徒がいた。

「・・・そういうことね」

女子生徒は顔を真っ赤にし俯いている。

誰が見てもどういう状況か分かるだろう。

「卒業式に告白か。定番と言えば定番だな」

「校章の色からして相手は二年だな」

「よく見えるな」

俺には女子ってことしか分からん。

「おっ、二年帰ってくぞ」

「振ったか」

「まあ、当たり前だな」

俺たちが知らないってことは多分直人も知らない子だろうし。

初めて会った子に告白されて付き合う人なんて、運良く両想いだったってこと以外ないだろう。

暫くして、女子生徒が去っていくのを見送った直人がこっちに来た。

「すいません、遅れてしまって」

「いいよ別に」

「しかし、何回目だ？直人が告白されたのって」

真也がからかいながら言うと、直人は苦笑いした。

「嬉しいには嬉しいんですけどね。知らない人だとちょっと困ります」

「贅沢な悩みだな」

「くそっ。いいよな直人、それに修も。二人ともすごいモテるし」
「何言ってるんだ？俺は別にモテないぞ」

「修さんには里桜さんがいますから。告白しても無理だってわかるから誰もしいんですよ」

「いいよな。可愛くて性格よくて家庭的な彼女がいて」
尋常じゃない妬みのこもった視線が向けられる。

「ふっ、羨ましいだろ」

「ちっ。腹立つ」

卒業だっていうのに俺たちのやり取りはいつも通りだった。

「あ、あの」

「ん？」

側に近寄ってきた女子生徒が恐る恐るといった様子で直人に声をかけた。

「白羽君。ちょっといいかな」

「あ、うん。いいよ」

「えっと、じゃあ向こうで」

「また直人かよ」

真也がぼつりと言い、悔しそうな表情を浮かべた。

直人は小声で、すいませんといい残すと女子生徒と人だかりの向こうに行った。

俺は手を振り、直人を見送った。

「お前はいつまでそんな顔してんだ」

鬱陶しくなってきたので、真也の頭を叩く。

「痛っ！彼女持ちに俺の気持ちは分かん」

「分かりたくもないわ」

「くっ。で、お前これからどうすんだ？」

「どうするって？」

「里桜ちゃん来ないからさ」

「ああ、あいつ放送委員だからな。卒業式の後始末あんだろ」と、話していると

「修先輩！」

「・・・噂をすればなんとやらってか」

声のした方向、正門の近くを見ると里桜が手を振っていた。

「声大きいっての」

周りの生暖かい視線が痛い。

「早く行ってやれよ」

「いいのか？」

「ここでお前らの惚気は見たくねえっての」

さっさと行け、と追いやるような手をする真也。

「ん、ありがとな。直人によろしく言っといてくれ。今度で連絡す
つから」

背を向け歩き出したとき

「修！」

真也の声に振り返る。

「・・・大学でもよろしくな」

「・・・はっ、当たり前だろ」

軽く手を振り応えた。

「お待たせ」

里桜の近くに来ると、さっきのこともあつてかすごい見られてる。

「真也先輩はいいんですか」

「早く行けだとき」

真也の方を見ると、いつの間にか戻っていた直人と一緒にほくそ笑
んでいる。

「てなわけだ。お前は挨拶する人いるか？」

「ううん、大丈夫です。もうしましたから」

相変わらず行動が早い。

「それじゃ、行くか」

「はい」

俺は三年間通った母校に背を向け並んで歩き出した。

後編（前書き）

後編です。

下書きを直しながらの投稿なのでミスがあるかも？

後編

俺たちは並んで桜並木を見ながら歩いていた。

「満開、だな」

「うん」

帰り道の途中、立ち寄ったこの公園は俺たちの大切な場所。

「それにしても」

「ん？ なあに？」

「敬語似合わないよなお前」

「学内はやっぱ敬語使わないと。いくら全校生徒公認の仲でもけじめはつけないといけないから」

「公認か」

全校生徒公認と言われてあの日を思い出してしまった。

「学園祭でお前がみんなの前でキスしたんだよな」

思い出すと顔が赤くなるのが分かった。

「あは。あの時は大変だったよね。みんなに追いかけられて」

「学園のアイドルがキスすりゃ男子は怒るわな」

まあ、おかげでいろんな人に認められたから良しとしよう。

暫く歩き、桜並木から道を外れた広場に着いた。

目の前にはこの公園の中でも一番立派な桜。

「眠ってた俺にお前が声をかけてきたんだよな」

この桜の下が俺たちが出逢った場所。

「だって、こんなところでぐっすり眠ってるんだもん。ほっといて風邪でも引かれたら寝覚め悪いし」

おかげで出逢えたんだけど。

「あの時は痛かったな。起きた修が私と頭ぶつけて」

「思い出したくない過去だよ」

「でも、いい思い出でもあるよ」

「まあ、な」

たく、そんな楽しそうな顔で言われたら何も言えねえよ。

「そういや、あの時里桜は何しに来てたんだ？俺すぐに帰ったし」

「歌の練習。修に逢っちゃって特に練習しないで帰っちゃったけどね」

里桜は桜に触れた。

「ここには沢山思い出があるよね」

「出逢った場所でもあるし、仲良くなった場所でもある」

「想いを伝えた場所でもあるよ」

「・・・そうだな」

「・・・今の間はなにかな？」

振り返り笑う里桜。

いや、その笑顔恐いから。

「俺が告白したのは学園の屋上だろ？」

「私が返事したのはここだもん」

思い出すように里桜は目を閉じた。

「嬉しかったなあ。私も好きだったから」

「さらりと恥ずかしいこと言うな」

「だって事実だもん」

笑う里桜につられ、俺も笑っていた。

「さて、それじゃ、修に卒業のお祝い」

「おっ、なにくれるんだ」

「私の新曲でどうかな？今日この日のために私が作詞作曲したんだ」
いいかな、と目で言ってくる里桜に

「最高のお祝いだよ」

優しく頭に手を置き撫でると嬉しそうに笑った。

里桜の隣に、桜を背にして腰掛ける。

里桜の歌を聞くとときはいつもこうしてる。

「それでは歌います」

一呼吸置き

「[桜の中で]」

里桜の口から紡がれる歌声。

学園で天使の鐘と称される程の優しい歌声。
俺はその歌声に包まれ眠りに落ちていった。

『………さい』

眠りから覚ますように声が聞こえた。

『………ください』

『んん？』

『起きてください』

言われた通り起きようと、ハッキリしない意識のまま頭を上げると

『きゃっ！』

『痛っ！』

ゴンツと、まるで漫画みたいな音がした。

『つう』

一気に目が覚め、目を開くと、頭を抱えた少女がいた。
どうやらこの子に頭をぶつけたらしい。

『わ、悪い。大丈夫か？』

少女に近寄ると

『は、はい。なんとか』

頭をさすりながら言われてもあまり説得力はなかった。

『本当にごめん。……あれ？その制服』

目の前の少女が着ていた制服は俺と同じだった。

校章の色からして

『白波学園の一年か？』

聞くと少女は頷いた。

『あつ、はい。白波学園一年の朝香里桜です。ええっと、先輩ですよね？』

『ああ、二年の桜井修だ』

『桜井先輩ですか。よろしく願います』

差し出す朝香の手を握る。

『こちらこそよろしくな、朝香』

「・・・よ」

聞き慣れた声が聞こえた。

「・・・ってば」

その声に、目を開こうとしたが

「はぁ、仕方ない」

え？

「起きろ！」

ゴンツと、ヘタすれば永眠しそうな衝撃が頭にきた。

「————っ！」

あまりの衝撃に声が出ない。

「あっ、起きた？」

頭をさすりながら笑って言う里桜。

「・・・永眠させる気か」

前と同じ様に頭突きで目を覚ますとは。

里桜が思いっきりやったのか、あの時より痛い。

「せっかく歌ってあげたのに寝ちやう修が悪い」

「え、あ、悪い」

そういえば夢を見てた気がする。

「どんくらい寝てた？」

「十分くらいかな」

立ち上がりながら腕を伸ばす。

「んゝ。ふう、悪いな、寝ちまって」

「いいよ、また今度歌ってあげるから」

「おう」

里桜も立ち上がる。

「お？」

携帯が振動しメールが届いた。

里桜に断りメールを開くと、妹の葵からだった。

「誰から？」

「葵から。母さんが料理作ってるから里桜も連れて来いって」
内容を伝えると、途端に里桜が満面の笑みを浮かべた。

「本当！？お義母さんの料理美味しいんだよね」

「なんか言葉おかしくなかったか」

「気のせい気のせい。ほら、早く行こ。葵ちゃんにも会いたいし」
「うおっ、引っ張るなよ。てか、お前家に連絡しないと」

「後でするから平気。だから早く」

「分かったから落ち着け」

急かす里桜を落ち着かせるが、まったく意味がない。

「はあ」

諦めて引っ張られるまま歩き出す。

「・・・悪くないよな。こんな生活」

きつとこれからも里桜と一緒にいればいつまでも笑えるだろう。

「修」

「ん？」

「ずっと一緒だよ」

笑う里桜に

「当たり前だろ」

俺も笑って返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169/>

桜の中で

2011年10月7日01時29分発行